

# 第 1 編

石田頼房先生  
都市計画研究者・  
実践者としての業績



# 研究者・石田頼房のあゆみ

渡辺 俊一

(東京理科大学 名誉教授)

## 1. 出生・成長

石田頼房は1932年2月7日、父・新八郎、母・くにゑの長男として、当時の東京府多摩郡国分寺村(現・国分寺市)で生まれました。翌年12月、一家は隣の武蔵野町吉祥寺(現・武蔵野市)の郊外分譲地へ移り、建築技術者であった父が自ら設計した木造戸建て住宅へ入居します。

石田の育った環境は、中産階級の郊外化がすすむ東京西郊でした。生家と新居は、ともに東京駅から西へ延びる中央線沿線にあり、国分寺の家は約40km、吉祥寺の家は約30kmにあたります。幼少の頃は自然好きの昆虫少年であり、都市化とともに周辺環境が変わってゆくを見て育ちました。すべてこれらの経験は、後の都市計画への関心、老後のバードウォッチング趣味のルーツでもあるようです。1945年8月、13歳の軍国少年・石田は敗戦を迎えました。

## 2. 大学から就職まで

1955年3月、石田は東京大学工学部建築学科を卒業します。前年、研究室配属にあたって高山英華教授の研究室を選びました。彼の卒業論文は「公営住宅に於ける用地取得問題」、卒業計画は「住区計画」でした。同年、大学院へ進学します。

高山教授は、当時の都市計画における学界・官界の重鎮であり、研究室では1年先輩に川上秀光、2年後輩に伊藤滋がおり、兩人とも後に東京大学の都市工学科教授となります。「放牧主義」を自認する高山教授の研究室は自由な雰囲気があり、石田はすでに学部3年時から学外の農村調査運動にも加わっていました(2005c: 64)。

この運動は、様々な分野の学生が農山村を調査し、地域の発展に役立とうというもので、彼は長野県上松町での調査に参加しました(石田裕子・頼房 2006)。石田はこのような活動の中で農村社会への関心をひろげ、社会科学的な調査方法と方法論に触れ、マルクス主義へと傾斜したものと思われま。1957年、彼は上記の調査をまとめて修士論文「地方都市とその周辺地域に関する研究」を提出し、つづけて博士課程へと進学しました。

1960年から翌年にかけては、石田の生活に大きな変化が生じた時期です。同年4月、東大大学院在籍のまま東京都立大学工学部建築工学科の助手に採用され、大学人としての生活を始めます。同時に、都立大の非常勤講師であった高山教授の代行として「都市計画」の講義を受けもち、以後4年間つづけます。同年5月、石田は上松町の農村調査運動で親しくなった小菊屋裕子と結婚しました。吉祥寺の実家をでて、大船駅近くの典型的な「一室木賃」へ入居しました。

翌1961年「大都市周辺地域における散落状市街化の規制手法に関する研究」にたいして東京大学から博士号を授与され、博士課程を修了しました。この論文は、当時最大の都市問題であった「スプロール問題」の現状と対策を追求したものです。現状分析としては、豊富な実証データにもとづいて、市街地・近郊農業の両サイドからスプロールの実態を明らかにしました。対策としては、都市計画制度における既成の諸手法を検討した結果、土地利用規制における新手法として「区域区分」制度を提案しています(1961)。

### 3. 初期の研究テーマ

研究者・石田の本格的活動は、1960年代初頭にはじまり2000年代初頭までの約40年間にわたります。出発点は博士論文であり、その研究テーマは東京など大都市圏周辺部のスプロールを抑制する土地利用規制でした。

周知のとおり、1960年代から始まるわが国戦後の高度成長にともない、大都市圏への人口と産業の集中が顕著となり、とくに周辺部の無秩序な開発、いわゆる「スプロール」は大きな社会問題となりました。その規制において、1919年以来の(旧)都市計画法による地域制などの規制手法では不十分であるとして、旧法を抜本改正して(新)都市計画法を制定する動きが始まります。その中心テーマの1つは、市街化抑制の制度としての「区域区分」の新設であり、石田の提案は、高山教授の主導のもと、都市計画学会の委員会や宅地審議会などで議論の対象となりました。

石田の博士論文(1961)では、既成市街地・開発区域・当面市街化抑制区域・非市街化区域の4区分でしたが、その後1962年の都市計画学会委員会での2区分、1964年の宅地審議会5次答申での2区分、1967年の宅地審議会6次答申での4区分を経て、最終的に1968年制定の(新)都市計画法では、市街化区域・市街化調整区域の2区分として法制化されました。

結果として、石田は新法の方式に必ずしも満足してはいませんでした。新進の研究者として自身の研究成果が法制過程にここまで関与できたという点では、彼はむしろ幸せな研究者生活のスタートを切った、と言えると思います。

1967年、35歳の石田は助教授に昇進し、自分の授業を開始しました。1977年、学内に「都市研究センター」が設立されると同時に、常勤不在の同センター研究員を兼務し、7年後の1984年、建築学科から同センターへ教授として転出しました。同センターは1994年、都市研究所に改組されますが、石田は1991からは所長として、1995年の定年引退まで勤めました。

### 4. 都市計画史

石田にとって、都市計画史は研究テーマの原点ではありませんでした。上述のように、彼の原点は大都市周辺部の土地利用規制でした。研究関心はそこから広がり、建築線・地域制・区画整理など関連する計画手法へと向けられ、それらの基本的性質を深く探求するにしたがい、その日本における経緯の点で歴史研究や、海外からの影響の点で海外研究へと展開していったのです。

たしかに彼は1960年、川上秀光との共著論文(川上・石田 1960)で戦災復興都市計画事業を取りあげ、そのご首都圏計画(1966)、東京大都市圏(1968)の歴史を書いてはいますが、その時点では歴史研究という意識はなかった、と後に自ら認めています(1993: 23)。

1970年代後半にはいると、彼は意識して都市計画史の本格的研究にとり組みはじめます。初期のテーマは、明治期の東京でした。テーマは「東京中央市区劃定之問題」(1979)、神田橋本町のスラム撤去(1980)などで、その延長上には森鷗外(1988b; 1999)の都市計画史的研究もあります。

1980年前後からは、都市計画史が研究関心の中心となり、原点であった土地利用規制・計画に関する歴史研究が繰り広げられます。地域制(1978)、建築線(1983b)、区画整理(1986)、開発利益(1990)、土地高度利用(1992)などについて、わが国における歴史を克明に辿っています。その対象地域としては、東京の都市構造(1991\*)、『未完の東京計画』(石田編 1992)など、東京が中心でありました。

彼の研究テーマはこれらに限られることなく、広範な対象をカバーしている点が注目されます。日本都市計画史の時代区分論(1987b)、都市デザイン(石田・ヴォイセツト 1993)、都市の土地政策(1995)、現代都市計画論(2000)、都市計画の分権化(2001)などです。これらは段階的に、日本都市計画の全体的本質へと迫る研究へと広がっている点が見てとれます。

石田はたぶん、日本の大学で最初に「都市計画史」を教科目として教えた教員でした。その講義にもとづいて、彼は『日本近代都市計画の百年』(1987a)を公刊しました。その増補版『日本近現代都市計画の展望：1868-2003』(2004a)は今にいたるまで、日本人の手による唯一の都市計画の通史であり、都市計画の標準的テキストとなった感があります。

石田の都市計画研究を全体的に特徴づけるのは、実践・実用への強い志向です。晩年にこう総括します。「私は都市計画の歴史研究者と見られがちですが、自分では歴史研究者というより主として都市農村計画の実際的問題に取り組んでいると思っています」(2005b: 1)と。彼が歴史研究に求めたものは、原点のスプロール研究と同様に、事実を見極めることによって都市計画のあるべき方向を探り出すことでした。「変容研究は……大げさにいえば地域や都市及び市街地の『発展法則性』の研究」(1993: 22)であり、それにより都市計画のあるべき姿を追求しようという立場です。

この点で興味深いのは、1995年の最終講義「2019年への都市計画史」(1996)です。彼は旧都市計画法100年にあたる2019年をターゲットとして、それにいたる25年後の「望ましい、可能な都市と都市計画の将来像」を提起し、それを段階的に達成するためには、計画制度(これが石田の専門領域)や計画主体が如何にあるべきかを描こうとしました。歴史研究の方法論としては問題がありそうですが、ここに彼の都市計画の研究哲学が読みとれると思います。

石田の都市計画史研究をあえて総括してみます。時間的には、東京市区改正条例(1888年)の以前から、戦後の高度成長期を経て21世紀初頭までの都市計画の法制度をカバーしており、分野的には、都市のみならず農村をも含む「都市農村計画」を視野に入れた、幅広いものとなっています。その膨大な研究著作は、広範な史料を発掘し精巧な議論を展開している点で、深みのあるものとなっています。そして全体を色づけているのは、研究は実践へ貢献すべきだという基本精神であり、そこには彼独自のマルクス主義への傾倒をうかがわせる価値判断が秘められているようです。

## 5. 国際活動・海外都市計画

石田の国際活動は、学究生活のかなり後期に始まりました。1979年、47歳の石田はヨーロッパへ最初の海外旅行をおこない、ストックホルム、ハンブルグ、リュベック、アムステルダム、ハーグ、デルフトとパリを訪問しました。以来2003年の引退まで、彼は国際会議のため約23回の海外旅行をしました。このうち西欧は15回にのぼりますが、アメリカはわずか2回です。これは彼の関心がアメリカよりも西欧に向けられていたことを示していると思います。

中国、韓国、香港、インド、オーストラリア、ニュージーランド等へは、合計6回旅行しますが、これらの都市計画にはほとんど研究関心を示しません。彼にとっての「近代」都市計画は、まさに「西欧(特にドイツ)」都市計画であったと思われます。

国際会議としては1982年、名古屋の国際連合地域開発センターの会議に出席したのが最初でした。そこで彼は、最初の英語論文(1982\*)を発表しました。テーマは地区計画制度であり、ちょうど2年前に制度化されたものです。石田はその制定過程に審議会専門委員として関与しましたが、実際に制度化されたものは規制力が弱い等、彼としては十分に満足すべきものではなかったものです。

1988年東京で開催された Planning History Group (現在の International Planning History Society) の第3回国際会議を契機に、彼は論文発表、会議出席、海外研究者との交流など精力的に活動を開始します。以降、彼は6回にわたりほぼ隔年開催の PHG-IPHS 国際会議へ出席し、毎回興味ふかい論文を発表しました。それらは東京(1988\*)、バーミンガム(1990\*)、香港(1994a\*)、テサロニキ(Ishida and Shoji 1996\*)、シドニー(1998\*)、ヘルシンキ(2000\*)と続きます。2006年のニューデリー会議は欠席しましたが、都市農地の保存に関する論文(2006b\*)を発表しました。さらにもう1つの国際舞台としては、European Association for Japanese Studiesがありました。1991年から2003年まで5回の会議に出席し、

論文を発表しています。

石田は海外の研究者との交流を深め、特に若手に対しては良き研究指導者として慕われました。晩年の小冊子(2004b: 34-35)の中で名前が挙げられている者は以下の通りです。Gordon Cherry (英), Françoise Durand, Marc Bourdier, Vincent Rounard, Natacha Aveline, Augustin Berque (以上仏), Winfried Flüchter, Carola Hein (Hein and Ishida 1998\*; 2003\*; 2006\*), Uta Hohn, Jeffery Diefendorf (2003\*) (以上独), André Sorensen (加), Jeffery Hanes (米) などです。

石田の外国語論文は、ほとんどが英語論文であり30本以上を数えます。全体として、過去・現代の日本、とくに東京における土地利用の問題とその規制・計画を中心に、日本都市計画の主要論点を幅広くカバーしています(1988\*; 1991\*; 1993\*; 1994a\*; 1994b\*; 1998\*; 2003\*; 2006a\*; 2006b\*; Ishida and Shoji 1996\*; Hein and Ishida 1998\*)。内容的には、とくに欧米の読者を念頭において各テーマについて詳細に分析し、批判的に説明しようと試みています。結果として、日本都市計画の過去・現在の姿を知るために、外国の研究者にとって良きガイドとなっています。

日本近代都市計画は西欧からの影響のもとに歴史的に展開してきた、という石田の基本認識からすれば、日本都市計画の研究において、西欧都市計画や都市計画史への研究展開は不可欠なものでありました。その点で興味ふかいは、海外都市計画との「接点」を扱った論文(1984)や、欧米都市計画の影響に関する講演記録(2002)です。これらはいずれも彼の個人的研究体験にもとづいた貴重な記録となっています。

## 6. 計画論

研究者・石田の40年にわたる歩み全体を見ると、ほぼ1980年代を境に大きく前後に2分されると見ることができます。

前述のとおり、石田の研究者生活の出発点では、自身の研究テーマと時代の要求とがほぼ合致し、研究成果が新都市計画法の制定過程で1つの位置を占めたという意味では、幸運なスタートを切ったといえましょう。彼にとって良き都市計画システムとは、「計画なきところ土地利用転換なし」の原則(2004a: 313)にもとづく「詳細で厳しい土地利用計画制度」であり(1988a: 81)、時代は確実にその方向へ向かっていました。

1968年都市計画法の区域区分も、1980年新設の地区計画も、彼の理論枠組からすれば不満が残るものの、良き都市計画の方向を歩むものでした。1960年代後半から70年前半にかけて、都市計画の現場である市町村では、社共を中心とする多くの革新自治体が出現しました。石田はこれを「民主的都市計画行政」(1987a: 317)への方向として、前向きに受けとめました。

しかし1980年代に入ると、政治の風向きは一変します。1982年、中曽根政権は規制緩和政策を始め、それは都市計画の中心である土地利用規制にも及びました。大都市での土地利用の規制緩和は、より高度の土地利用により最大の収益を得ようとする土地所有企業やデベロッパーにとって、極めて有利な状況となりました。しかし石田の眼には「1968年都市計画法……によって、やっと形を整え、1980年の地区計画制度などによって補強しつつあった『詳細で厳しい土地利用計画制度』という檻を壊し、地価という虎を野に放ってしまった」(1988a: 81)と映りました。その先には1991年「バブル経済」の破綻が待っていました。

石田の研究パラダイムと日本の社会パラダイムとの乖離は決定的となりました。彼にとって、中曽根民活は「反計画」という路線の出発点でした。「反計画」なる用語は、都市計画学界では必ずしも確立していませんが、彼の日本都市計画史においては「1980年代初めから1995年頃まで……また、2001年後、小泉……首相(の)『都市再生計画』は……『反計画』政策とほとんど同類」(2004a: 271-2)という判断にもとづき、この時代の主要概念として批判的に刻み込まれています(1987a: 325-332; 2004a: 271-286)。

中曽根民活は、石田にとっては、生涯をかけた研究成果への根源的挑戦であり、都市計画の「進歩」に逆行するものである、と映りました。「1968年都市計画法制定以後、1970年代を通じた都市計画の……進歩……である土地利用計画・規制の強化、公有地拡大・地価抑制、地域住民・地方自治体の役割の拡大……(という)日本近代都市計画史全体をつらぬいている都市計画の進歩に対する逆流であ(り)……「単なる『規制緩和』(デレギュレーション)というより『反計画』(ディスプランニング)と呼ぶ」べきものでありました(1987a: 326)。

石田は理論的に反論すべく、1つのアプローチをとります。それは「計画とは何か」「計画は如何にあるべきか」について、日本都市計画史の中に、主に土地利用に関する「計画」の実態と「あるべき姿」を求めようとするものでした。ここでも彼は、史実を知ることにより将来指針を得る、という立場で進めます。市区改正以来の「計画」の意味について探り、「土地利用」の本質とそのあるべき姿を模索します(1987c; 1988a; 1993; 1998)。

その結果として、計画とは「都市にかかわるものの共同の意志・目標像としてのプランを持ち、それをもっとも効率的に実現してゆくための方法・手段を筋道たてて企てること」であるに対して「民活路線は規制をなくし……共同の目標像としての計画という……概念はまったく見られない」(1987c: 84)。それはつまり「反計画」であるという論法に至ります。

ただし今から見れば、もう1つのアプローチがありえたかも知れません。それは、都市計画における「主体」への着目です。中曽根民活が提起した問題点の1つは「都市計画において、市場経済の主体である企業を如何に位置づけるか」と捉える可能性があった筈です。かつて農業関係者という主体に十分に着目して理論展開した石田にとって、デベロッパーという主体のもつ固有の「法則性」に注目しつつ、規制対象を超えた、良き都市の建設者としての役割を理論的に求めることは、能力的に見て不可能だったとは思えません。いや、彼固有の主義主張としては、やはり不可能だったのかも知れませんが。

こうして1980年代後半から、石田の研究姿勢が大きく変化します。以前は、自己の研究成果が現実の都市計画に直接的に役立つ、という実用性を志向したのに対して、以後は、都市計画の歴史や国際比較において、日本都市計画の全体的本質を批判的に追求するという、ある種の理論性を志向したのです。しかしその先には、その「理論」が将来の、端的には21世紀の都市計画のあるべき姿を描き出すべきであるという、間接的な「実用性」が控えていました(2000; 2004a; 2004b)。その典型は、前述の最終講義「2019年への都市計画史」(1996)です。

## 7. 研究管理システム

石田は約40年にわたる研究者生活において、860をこえる編著書・論文等の著作を残しています。注目すべきは、その膨大な量質とともに、それらを管理したシステムです。今回、彼が遺した電子ファイルを整理しながら、あらためて研究者・石田頼房の研究管理システムに多くを学びました。

第1に、自分の研究記録を克明に記している点です。それは、履歴書(c.2006)、年譜(c.2003b)、分類別著作リスト(c.2003a; c.2005; c.2008)から、居住歴(2005a)、生活歴(石田裕子・頼房 2006)にまで及んでいます。(詳細は「石田頼房の研究記録等(メモ)」(渡辺 2016)を参照)。

第2に、個別論文の執筆にあたり、自己の先行研究との関係を十分に気にしている点です。結果、参考文献には自己の著作が居並ぶこととなります。また講演にあたっては、綿密な配付メモや講演原稿を用意するだけでなく、しばしば講演記録にさらに手をいれて論文形式にするのです。最終講義「2019年への都市計画史」(1996)が好例です。こうして、石田の個別著作は全体への目配りの上、壮大な成果体系へと積み重なっていったのです。

第3に、さらに自己の著作と研究活動自体を、ある種の研究対象として分析している点です。このいわば「自省研究」ともいべき分野は、研究者・石田のユニークな特徴といえましょう。著作については、

自己のベスト30論文に関して解説を付した「自選25編+  $\alpha$ の解説」(c.1998)があり、また研究活動については「都市農村計画における計画の概念と計画論的研究」(1993)や『展望と計画のための都市農村計画史研究』(2004b)などにおいて、興味ふかい見解を鮮明に披露しています。

以上の研究管理システムは、結果として、石田の都市計画研究体系を正確に理解することを可能とするばかりでなく、われわれ自身の研究営為の進め方についても大きな示唆を与えるものと思われま

## 8. 学会活動

石田の国内での学会活動は、主に3つに集中していました。第1は、日本都市計画学会です。1956年、修士院生の石田は設立5年後の同学会に入会し、以降ここを学会活動の中心として活動します。

同学会において、石田は4つの賞を受賞します。①1962年、前年提出の博士論文「大都市周辺地域の散落状市街化の規制手法に関する研究」に関して1961年度石川奨励賞(論文調査部門)を受賞しました。②1965年、浦良一・石田・井出久登の連名で、1964年度石川賞(計画設計部門)「八郎潟干拓地新農村集落計画」を受賞しました。③1983年、「市街地形成とその規制手法に関する一連の研究」に関して1982年度論文賞を受賞しました。④2001年11月の都市計画学会50周年式典では、69歳の石田は同年設立の功労賞を11名の1人として受賞しました。

同学会の主な役職としては、学術委員長(1985～1989年)、副会長(1989～1991年)をつとめ、2001年に名誉会員に推挙されました。

第2は、日本建築学会で、石田は1957年に入会します。1991年「日本近代都市計画史に関する一連の研究」に関して「1991年建築学会論文賞」を受賞します。これは同賞における最初の都市計画史に関する研究成果であり、建築全分野からの10名の受講者の1人として受賞しました。2004年、72歳の石田は「わが国における近代都市計画史の研究とその発展に尽くした功績」として全分野からの受賞者2名のうちの1人として「2004年建築学会大賞」を受賞しました。その後2006年、名誉会員に推挙されました。

第3は農村計画学会です。本学会は1982年、より良き農村環境・農村社会の創出をめざす研究者・実践者・生活者の交流・啓発の場として設立されました。石田は設立時からの会員であり、後に副会長(1992～93年)、会長(1994～96年)を務め、2002年名誉会員に推挙されています。

## 9. その他の外部活動

石田は、都立大以外に多くの他大学の非常勤講師として都市計画を教えました。列举すると、和光大学(1969～73年)、福井大学(1977～85年)、東京農工大学(1982～90年)、明治大学(1982～90年)、日本女子大学大学院(1983～99年)、日本大学大学院(1992～93年、1997～99年)、日本大学(1999～2001年)、東京農業大学(1996～99年)などがあります。

彼は、自分の研究成果を文献として公にするだけでは満足せず、現実の都市計画行政へ反映させることにも積極的でありました。事実、その現場から新鮮な問題意識を拾い上げ、たえず自分の都市計画論へ繰り込みました。

中央政府の関連では、①資源調査会専門委員(1962～72年)、②建設省都市計画中央審議会専門委員(1978～80年、1982～89年)、③経済審議会臨時委員(1989～90年)、④小笠原諸島振興開発審議会委員(1992～2000年)などを務めています。このうち②の2回目については前述のごとく、中曽根民活・規制緩和路線の影響で勧告が出せない状況となり、石田は苦勞しました。

石田は都市計画の専門家として4回、国会の参考人として意見を述べる機会をえました。それは①参議院土地問題特別委員会(1990年)、②衆議院国会等移転問題特別委員会(1999年)、③衆議院建設委員会(2000年)、④参議院国土交通委員会(2002年)でした。



地方政府の関連では、石田は多くの場で委員、委員長を務めました。東京都・神奈川県・埼玉県・富山県のほか、横浜・立川・富士見・八王子・鎌倉・上尾各市など、主に首都圏に自治体で活躍しました。

市民活動としては、自らの主義主張に近い、自治体問題研究所役員(1970年～)、全国自治体学校校長(1998～2002年)、かながわ総合科学研究所理事長(2000～04年)などを務め、最後の肩書きは、NPO法人かながわ総合政策研究センター理事長(2002年以降)でありました。

## 10. 引退その後

1995年3月末、63歳の石田は東京都立大学を定年引退し、名誉教授になりました。ひきつづき同年4月からは工学院大学建築学科の特別専任教授となり、4年後の1999年3月末で定年退職します。同年4月からは都立大都市研究所の客員研究員として、4年間勤めました。

2003年3月、71歳の石田は研究者としての職を離れ、完全な年金生活に入りました。老後は研究面とともに、地元地域の活動や趣味のバードウォッチングなどを楽しみました。じつはその1年余まえ、2001年末に41年間つれ添った最愛の妻・裕子に先立たれており、「独居老人」と称して自らを慰めました(2004: 54)。

2004年の建築学会大賞の受賞を機会に、石田は小冊子『展望と計画のための都市農村計画史研究』(2004b)を公刊します。自らの生涯をかけた研究領域を「都市農村計画史」と規定している点が注目されますが、これが日本の都市計画学界にたいする、事実上の遺言となりました。最後のページでは「残されている時間がどれだけかは……わかりませんから……小さなことを一つずつ片付けて達成感を味わい……つつやっつてゆこう」(2004b: 55)と記しました。

5年後の2009年5月10日、石田の喜寿を祝うため、拙宅で秋本福雄・中島直人らと共に待っていました。が時間になっても、主客は現れません。あちこちへ電話した結果、彼が3日まえ脳卒中で緊急入院したことを知らされました。以来6年間を病床で過ごし、完全な意識を回復するに至りませんでした。

2015年11月4日、石田頼房は肺炎のため逝去しました、享年83歳。遺族は息子2人、娘1人、孫2人です。通夜は同月7日、お別れ会は翌8日、地元の青葉台で執り行われ、都立小平霊園の石田家墓地へ埋葬されました。裕子も眠るその墓所は、旧国分寺村の彼の生家から北5kmの地にあたり、墓石は石田自身の手により設計されたものでありました。

## 参考文献

- 注1：発行年について(1961)は和文文献、(1961\*)は欧文文献を示します。
- 注2：〈〉は「石田著作番号(仮称)」を示します。なお同番号を含む、石田の記録等については(渡辺2016)を参照。
- 石田裕子・石田頼房(2006)『二人で歩いた まち・むら・人生』南風舎。(未番号)
- 石田頼房(1961)「大都市地域周辺地域における散落状市街化の規制手法に関する研究(学術論文抄)」『都市計画』No. 31, pp. 2-18。(博士論文の自抄)〈2-5〉〈12-2〉
- (1966)「首都圏整備法までの10年と首都圏整備法後の10年」『建築雑誌』No. 967, pp. 29-35。(4-16)
- (1968)「大都市圏発展と計画：戦後の東京大都市圏計画の変遷」『都市構造と都市計画』東京都立大都市研究会編, 東大出版会, pp. 621-664。(1B-3)
- (1978)「日本における市街化抑制のための地域制の発展：1945年まで」『都市計画と居住環境』東京都立大学都市計画研究室編, pp. 181-202。(4-79)
- (1979)「東京中央区区劃定之問題」について」『総合都市研究』No. 7, pp. 15-34。(2-11)
- (1980)「1881年の神田橋本町改良事業に関する研究(1)～(3)」『建築学会論文報告集』288, pp. 157-165; 290, pp. 107-117; 291, pp. 79-87。(2-12)〈2-13〉〈2-14〉
- (1981)「1968年都市計画法の歴史的背景と評価」『都市計画』No. 119 (1981.12), pp. 9-15。(4-109)
- (1983a)「真に長期的観点にたった都市整備の推進のために」『経済』No. 235, pp. 108-123。(12-14)
- (1983b)「建築線制度に関する研究(7):ドイツ都市計画制度における街路線・建築線と地区計画」『総合都市研究』No. 19, pp. 69-94。(2-24)〈12-16〉
- (1984)「日本近代都市計画史における海外都市計画との接点について」『都市計画』No. 133, pp. 37-41。(4-119)
- (1986)「日本における土地区画整理制度史概説 1870-1980」『総合都市研究』No. 28, pp. 45-88。(2-27)〈12-15〉

- (1987a) 『日本近代都市計画の百年』自治体研究社. <1A-4>
- (1987b) 「日本近代都市計画史の全体像と時期区分」『都市計画』No. 144, pp. 30-33. <4-125>
- (1987c) 「計画という概念とその機能」『科学と思想』No. 64, pp. 802-804. <4-127>
- (1987d) 『日本近代都市計画史研究』柏書房. <1A-5>
- (1988a) 「土地利用の思想と計画の理念：都市の土地問題解決の基本的方向」『文化評論』3月号, pp. 78-97. <4-135>
- (1988b) 「森鷗外の屋制新議と東京市建築条例」『東京：成長と計画 1868-1988』都市研究センター. <1A-7> <12-19>
- (1990) 「開発利益の還元問題の歴史と政策」『大都市の土地問題と政策』石田頼房編, 日本評論社, pp. 3-6; pp. 153-197. <1A-8> <12-21>
- (1992) 「土地高度利用論の歴史的展開：概説及び田口卯吉の高度利用論と現代」『総合都市研究』No. 46, pp. 23-45. <2-39>
- (1993) 「都市農村計画における計画の概念と計画論的研究」『都市総合研究』No. 50, pp. 19-35. <2-41>
- (1995) 「日本の土地利用計画政策：現状と問題点及び改革の展望」『東京経大会誌』No. 190, pp. 27-39. (Ishida 1994b\* の和訳) <2-42>
- (1996) 「2019年への都市計画史：A Peaceful Path to Real Reform of Japanese Planning」『総合都市研究』No. 58, pp. 123-144. <4-182>
- (1998) 「計画の概念と機能、その歴史的発展：今後の自治体行政との関連で」『市政』47:8, pp. 77-82. <4-185>
- (c.1998) 「石田頼房の都市計画論文・評論：自選25編＋αの解説」<12>
- (1999) 『森鷗外の都市論とその時代』日本経済評論社. <1A-13>
- (2000) 「21世紀の都市農村計画のあり方を展望する：日本現代都市計画の歴史的展望をふまえて」『経済』No. 59, 8月号, pp. 79-93. <4-188>
- (2001) 「日本の都市地域政策における地方の独自性と分権」『総合都市研究』No. 74, pp. 23-45. <2-50>
- (2002) 「欧米都市計画の影響と日本近代都市計画史」『日本建築学会都市計画委員会都市形成・計画史小委員会第3回公開研究会「欧米との比較から見た日本の近代都市計画」報告書』pp. 16-21. <4-195>
- (c.2003a) 「石田頼房全著作リスト」. <1> ~ <8>
- (c.2003b) 「石田頼房年譜」16 pp. <0B>
- (2004a) 『日本近現代都市計画の展開：1868-2003』自治体研究社. (石田 1987 の増補版) <11A-10>
- (2004b) 『展望と計画のための都市農村計画史研究』南風舎. <13>
- (2005a) 「私の「住みかたの記」と都市・住宅問題：西山卯三『住み方の記』にならって」『都市科学研究科資料』(2005.3.26). <未番号>
- (2005b) 「現代都市農村計画の歴史と今後を考える」NPO かながわ総合政策研究センター講演会記録(2005.2.19/3.5). 13 pp. <未番号>
- (2005c) 「都市農村計画を計画史的に考える」『建築雑誌』120:1540 (12月号), pp. 64-67. <9C-135>
- (c.2005) 「石田頼房都市農村計画史関係著作目録」. <11>
- (c.2006) 「履歴書」6 pp. <0A>
- (c.2008) 「石田頼房都市農村計画関係・まちづくり関係最近の著作リスト」<9>
- 石田頼房 編(1992) 『未完の東京計画：実現しなかった計画の計画史』筑摩書房. <1A-10>
- 石田頼房、H. ドォネン・ヴォイセット(1993) 「日本における都市空間形態と隠れた都市デザイナー」『総合都市研究』No. 49, pp. 139-155. <2-40>
- 川上秀光・石田頼房(1960) 「変貌する都市：転機を迎えた戦後日本の都市計画」『建築年鑑 1960』美術出版社, pp. 33-47. <4-4>
- 川手昭二・浅谷陽治・石田頼房(1957) 「区画整理手法による宅地開発の問題(その1)」『建築学会論文報告集』57:2, pp. 357-360. <2-2>
- Hein, C. and Ishida Y. (1998\*) “Japanese Stadtplanung und Ihre Deutschen Wurzeln,” *Die Alte Stadt*, 3:98, pp. 189-211. <2-49>
- Ishida, Y. (1982\*) “The District Planning System in Japan: Focus on Its Relationship with Land Readjustment,” *Conference Proceedings* (United Nations Center for Human Settlements), pp. 232-234. <3A-1>
- (1988\*) “Some Failures in the Transference of Western Planning System to Japan,” *PHG Proceedings* (Tokyo), pp. 543-567. <3A-3>
- (1990\*) “Japanese Industrial Villages and a Reformist Factory Owner,” *Planning Perspectives*, 5:3, pp. 295-305. <2-34> <12-20>
- (1991\*) “Achievements and Problems of Japanese Urban Planning: Ever Recurring Urban Dual Structures,” *Comprehensive Urban Studies*, No. 43, pp. 5-19. <2-37> <12-22>
- (1993\*) “Japan in the World History of Modern City Planning,” *Prospect* (IFHP), No. 3, pp. 57-60. <4-169>
- (1994a\*) “Agricultural Land Use in the Urbanized Area of Tokyo: History of Urban Agriculture in Tokyo,” *IPHS Proceedings* (Hong Kong), pp. 103-123. <3A-11>
- (1994b\*) “Japanese Urban Land Use Policy: In Historical and Comparative Perspectives.” *Proceedings of Kyoto Conference on Japanese Studies 1994*, II, pp. 121-143. <3-13>
- (1998\*) “War, Military Affairs and Urban Planning,” *IPHS Proceedings* (Sydney), pp. 393-398. <3A-21>
- (2000\*) “Eika Takayama: The Great Figure in Japanese Urban Planning in the 20th Century,” *IPHS Proceedings* (Helsinki). <11F-5>
- (2003\*) “Japanese Cities and Planning in the Reconstruction Period: 1945-55,” In Hein, C., Diefendorf J. and Ishida Y., eds., *Rebuilding Urban Japan after 1945*, London: Palgrave Macmillan. <1A-15>
- (2006a\*) “Local Initiatives and the Decentralization of Planning Power in Japan.” In Carola Hein and Philippe Pelletier eds. *Cities, Autonomy, and Decentralization in Japan*, London and New York: Routledge, pp. 25-54. <9-52>
- (2006b\*) “Preservation of Urban Farmland and Forests: Particular Policies and Citizen’s Participations in Yokohama City,” *IPHS Proceedings* (New Delhi). <9-53>
- Ishida, Y. and Shoji S. (1996\*) “Water Front Development in Tokyo: Tokyo Expanded to Vanishing Tokyo-wan Bay,” *IPHS Proceedings* (Thessaloniki), Vol. 2, pp. 550-564. <3A-16>
- 渡辺俊一(2016) 「石田頼房の研究記録等(メモ)」5 pp.
- Watanabe, Shun-ichi J. (2016\*) “The Life and Works of Professor Yorifusa Ishida (1932-2015): A Pioneer of Planning History in Japan,” *IPHS Proceedings* (Delft) Vol. 6, pp. 117-128.